



京都大学  
KYOTO UNIVERSITY

総合人間学部／大学院人間・環境学研究科

Faculty of Integrated Human Studies / Graduate School of Human and Environmental Studies

No.

75



2025.12

# 総人・人環 広報

## 特集 新任の先生方より

着任のご挨拶 .....	林 雅行.....	2
雑多に読んでみる .....	中村 仁紀.....	3
スペイン語と地域言語政策研究と私 .....	柿原 武史.....	4
距離を確かめながら .....	二宮 美那子.....	5
発掘資料から読み解く先人たちの知恵と暮らし .....	神野 恵.....	6
文化と自然が融合する街「京都」での新たな挑戦.....	桑野 太輔.....	7

## 連載企画「総合人間学とわたし」

総合人間学部とわたし .....	柴田 悠.....	8
------------------	-----------	---

新任の先生方より

## 着任のご挨拶

林 雅行

大学院人間・環境学研究科 数理・情報科学講座

総合人間学部 数理・情報科学講座（認知情報学系）



2024年4月に数理・情報科学講座に准教授として着任しました。昨年度は不慣れな学内業務に手一杯で一年遅れの執筆となってしまう、総人広報の関係者の皆様にはご迷惑をおかけしました。お詫びと御礼を申し上げます。前任はイタリアのピ

サ大学で、その前は京都大学の数理解析研究所および理学研究科でポスドクをしておりました。ピサに異動する際はこんなにも早く京都に戻ってこられるとは思ってもみなかったので、京都大学で働く機会を与えていただいた人間・環境学研究科および総合人間学部には大変感謝しております。

私の専門は偏微分方程式論で数学の解析学の一分野にあたります。良い機会なので数学を専門とすることになった経緯を振り返ってみます。学ぶことに喜びを見出すようになったのは高校時代が最初だったと思います。私は早稲田大学高等学院という早稲田の附属高校が出身なのですが、そこは全く校則がない自由な高校で、先生方は大学の先生のような雰囲気をもった独特な方が多かったです。学生（通称：学院生）の方はといえば、大学受験のない附属校なこともあり大抵真面目に勉強しなくなり、勉強するといっても留年回避で行きたい学部に入るための最小限度の成績を確保する「コスバ重視」の勉強だった印象です。そんななか受験勉強に縛られることのない主体的な学びに喜びを見出していた私は学院生の中では超少数派でした。当時は知的好奇心の赴くままに勉強していて、例えばアガサ・クリスティの原書や徒然草の原文を熱心に読み込んだりしていました。色々勉強してみて一番好きだったのが数学で、特に微分積分を初めて学んだときの感動が大きく、解析学を専門にする契機になったといえると思います。

大学の学部選択では最初は数学科を検討していたんですが、数学科を擁する早稲田の基幹理工学部は一年生のときは専攻が定まっておらず、一年次の成績をもとに二年生から各学科に分かれるという東大の進振り制度を中途半端に取り入れた学部で、数学科はそのなかでも人気がない位置づけでした。また当時は基幹理工の内部進学枠が定員割れを起こしており、希望通りの学部に行けず志が低いまま進学する学院生が集まる可能性を懸念していました。担任の先生と相談して他の選択肢も含めて色々考えた末、最終的には大学の物理はかなり深いレベルで数学を使うという先輩からの情報が決め手となって、先進理工学部の応用物理学科に進学することに決めました。

大学に進学後は、幸い私の同期はレベルが高く、もはや「超少数派」ではなくなり、一緒に勉強する良い仲間もできました。物理を学ぶにつれて、偏微分方程式が自然現象を表現する基礎方程式として様々な場面で使われていることを知り、当時はどうやって解くのか検討もつかなかった偏微分方程式をちゃんと理解したいと思うようになり、4年生のときに解析系の研究室に入門し、それ以降は数学を専門に研究を続け現在に至ります。学部生のときに物理や工学の先生方から数学が使われる背景や数学者との立場の違いを授業を通じて多少なりとも学べたので、結果的に高校のときの学部選択はこれでベストだったのではと思っております。

さて今年から総人クラスの微分積分の授業を担当しているのですが、総人の学生さんは意欲的な方が多く、質問もよくしてくれて、とてもやり甲斐を感じています。彼らに数学の考え方や奥深さをちゃんと伝えられるように毎回の講義に力を入れつつ、研究面でも良い仕事が続けられるように日々の努力を忘れずに精進していきたいと思っております。

（はやし まさゆき）

新任の先生方より

## 雑多に読んでみる

中村 仁紀

大学院人間・環境学研究科 芸術文化講座

総合人間学部 芸術文化講座 (国際文明学系)



大学院まで大阪大学文学部の英米文学科で学び、その後大阪医科薬科大学で長く英語・教養教育に携わったのち、2025年4月より本研究科の芸術文化講座に着任しました。大学院時代に一度、

京都大学文学部の英詩の集中講義に参加したことがありましたが、それ以外で本学とのご縁はほとんどありませんでしたので、この素晴らしい環境の中で研究・教育に携わる機会をいただけたことに身の引き締まる思いです。

私の専門は18世紀末から19世紀初頭のイギリス・ロマン主義ですが、研究の中身はあまり文学らしくないかもしれません。主な関心は、この時代の詩や批評に加え、科学や哲学における「ものの考え方」がどのように交錯し、相互に影響を与えていたか、というところにあります。もともと大学生の頃より、詩や小説を鑑賞すること以上に、人が何かを美しいと感じるときの認識や想像、思考のあり方に興味がありました。卒論ではジョン・キーツという詩人の美意識について書きましたが、作品そのものより、詩人が自分の感覚をどのように言葉で表現するかという思索的な面に関心があったように思います。その後は、サミュエル・テイラー・コウルリッジという詩人・批評家が研究の中心になりましたが、彼は文芸、哲学、宗教、政治、科学、医学などを幅広く読み漁る読書人であると同時に、それらの背後にある共通の原理を探し出そうとする人でもありました。私自身も、そうした雑多な中に筋道を見つけようとする彼の読書姿勢に触れて、その時代の思考のあり方や変化を知るために、分野を超えて文献をいろいろと

読んでみるやり方がしっくりくるようになりました。

こうした取り組みはしばしば「領域横断的」と表現されますが、ロマン主義時代はそもそも「横断」するための専門領域の境界自体がまだ十分確立していない時期にあたります。そのため、私の研究はむしろ未分化なところに分け入って、境界線や接点がどこにあるかを自分で探してみるイメージです。それをするためには、まずは文学も科学も哲学も同じ目線でフラットに読んでみるのが大事で、一見地味な作業に見えるかもしれませんが、様々なアイデアやイメージが交錯する状況を見渡す中で、新しい知が生まれる場に立ち会っているような感覚を覚えることもあります。

最近では19世紀半ばあたりを範囲として、学問の専門化・制度化が進む中で文学的な表現や比喻、語りの様式がどのように科学的思考と共存・対立し、また棲み分けられていったのかに関心を向け、授業でもこうした観点から具体的なテキストを読んでいるところです。またその過程で「科学のようで科学でないもの」が疑似科学として周縁化されていく状況を文学やフィクションとの関わりからも考えています。

総人・人環の特色である学術越境という理念を自分なりに考えたとき、こうした視点を大切にしながら、多様な専門領域や関心を持つ先生方や学生の皆さんとの関わりを深め、新しい気づきを得る機会をこれからたくさん作っていけたらと思っています。芸術文化の研究の本筋とは違うかもしれませんが、そうした雑多な「読む」営みの中でこそ、文学や芸術の固有の価値を改めて問い直すこともできるかもしれません。

(なかむら よしき)

新任の先生方より

## スペイン語と地域言語政策研究と私

柿原 武史

大学院人間・環境学研究科 言語科学講座

総合人間学部 言語科学講座（認知情報学系）



2025年4月に言語科学講座に着任しました。前職は関西学院大学でスペイン語と言語教育政策や異文化理解の授業を担当していました。京大ではスペイン語のほか、人環と総人で少数言語を巡る言語政策について講義や

演習を担当しています。

私は大阪外国語大学（現大阪大学）でスペイン語を専攻しました。スペイン語を学ぼうと決めたのは、私が進路を考えていた頃、スペインがブームになっていたからかもしれません。1992年、バルセロナ・オリンピックやセビリア万博が開催され、新聞やテレビでは連日スペインが取り上げられていました。これらは、コロンブスのアメリカ到達500年を記念したビッグイベントでしたが、当時のスペインは1975年にフランコ体制が終わり、1978年に民主憲法を制定し、1986年にEC加盟を果たすなど、民主国家として国際社会に認められ、新たな発展の時代を迎えようとしていました。そんな勢いのあるスペインに魅力を感じたのだと思います。

さて、私は言語政策を中心に言語社会学的な領域に関心を持っています。学際的な、まさに人間・環境学的な越境が必要な領域です。最近ではアメリカ合衆国のトランプ大統領が英語を合衆国の公用語にする大統領令に署名したことが話題になりましたが、これも言語政策研究の対象です。公用語とは何なのか？アメリカ合衆国の公用語は何語なのか？なぜこのような大統領令が出されることになったのか？…など様々な疑問が湧いてきますが、これらの疑問に答え、その背景にある社会課題を明らかにしていくことが主な目標です。アメリカ合衆国は連邦レベルで公用語は定めていません（でした）。これは建国以来、英語話者が主流派

であったものの、ドイツ語やフランス語などを話す移民も多く、彼／彼女らの感情を逆なでしたくないという理由があったと考えられます。また、英語が事実上のリング・フランカ（共通語）であったため、わざわざ法律に明記する必要がなかったこともあります。（日本の日本語の場合も同じです。）他の言語を無視して、一つの言語を国家運営のために用いる単一言語主義が採られたわけです。しかし、中南米やアジアから文化的背景が大きく異なる移民が増え、マイノリティーの権利拡大が進んだことなどから、英語話者が脅威を感じ、英語を公用語にしようという運動が1980年代以降盛んになり、多くの州で英語が公用語になりました。今回の大統領令による英語公用語化は、それが最も顕在化したものといえましょう。

公用語と言えば、先に触れた1978年スペイン憲法は、国家の公用語をカスティーリャ語（スペイン語）とし、自治憲章で公用語を定めた自治州に対しては、その言語も自治州公用語とすることを認めました。その結果、現在では6自治州がスペイン語とともに地域言語を公用語としています。私がフィールドとしているガリシア自治州は、ガリシア語をスペイン語とともに公用語としており、民主化以降約45年にわたりその回復と普及をめざす言語政策を実施してきました。その結果、ガリシア語の標準変種が整備され、教育により知識が普及し、社会の多くの領域で使用されるようになりました。しかし、日常使用は低迷しており、試練に直面しています。私は現在、その理由や背景を探るべく、調査、研究をしています。最近では、ガリシア域外でガリシア語を学ぶ人たちの動機を調査しています。

AI全盛の今、外国語教育の意義が問い直されています。この人環、総人の素晴らしい環境で、言語を学ぶことの本質を考えていこうと思っています。どうぞよろしくおねがいします。

（かきはら たけし）

新任の先生方より

## 距離を確かめながら

### 二宮 美那子

大学院人間・環境学研究科 東アジア文明講座  
総合人間学部 東アジア文明講座（国際文明学系）



2025年4月に着任いたしました。京都大学は長い間学生気分で（多くは実際に学生として）過ごした場所で、教員としてここにいるということに、場違いなような落ち着かない感覚がまだぬぐえません。授業に向かう

ため中庭からアーチ状の建物の下をくぐり、桂の木が並ぶ正門付近に出ると、その明るさに毎回はっとすると共に、大げさですが隔世の感を覚えます。昔は正門にも自転車が自由に行き交い、所狭しと停められた自転車をかき分けるようにして、休講情報の掲示板を眺めに行ったものです。一方で、ふとした時に変わらないものに出くわすこともあり、新しさと過去の記憶との斑模様刺される日々です。

前任の滋賀大学では教育学部におり、教員を目指す学生に囲まれて11年過ごしました。国語科の「漢文」を担当していた訳ですが、高校時代までなじみがあったはずのこの語に赴任当初なぜか戸惑いを覚え、京大の中文研（中国語学中国文学研究室）を経て、いつのまにか外国の文学を勉強しているという意識が強く生まれていたことに、改めて気付かされました。この4月からは中国語と中国古典を教える立場となり、目下もう一度、対象との距離を確かめなおしているところです。

専門は中国古典詩で、唐代を中心に「園林」「旅」「女性」など関心をもったテーマで様々な作品を読んでいます。中でも長年取り組んでいるのが「園林」をめぐる作品です。園林は「庭園」に近い語で、観賞用の庭から住居・居宅まで含み得る概念と理解しています。興味を抱いたきっかけは、学部生の頃読んだ杜甫の詩でした。都・長安で求職活動をしていた杜甫が、敬愛する鄭虔のお供をして貴人の別荘に遊び詠んだ連作詩には、趣向を凝らした大小様々な自然の様相、野趣溢れる食事、

素朴な民の姿、暗がりに潜む人外の存在などがたっぷりと描かれていました。人の手を経て作られた園林が、詩人の視線によって作品に仕立てられる、人為と自然とが重層的に織りなす作品に惹きつけられました。「園林」という概念自体は古典詩における伝統的な枠組みにはなく、故に関心の形は実際の作品に応じて様々に変化して行きました。仕官と隠逸、所有や所属意識などの問題を考える中で、中国古典詩の「型」への関心が深まり、その形成や逸脱についても考えをめぐらせつつ、作品を読み続けています。興味の根底には、人間が外界をどのように捉え、言葉で表現するかということがあります。大いなる勘違いかもしれませんが、人間・環境学という語に勝手な親近感を覚えています。

本音を言えば、中国古典を読むという行為は分からなさと同じく向かい合う修行のような面もあります。一つの語が、時に重厚長大な背景を背負って詩の中に据えられ、また時には「味読する」地点に至るまでに、社会制度・情勢や詩人の人生、注釈の蓄積と格闘し、道筋を探してもがくこともあります。ようやく掴んだ実感を言葉にしようとして、こぼれ落ちていくものを見る悔しさも拭い難いものです。けれど、これらの作業の中にも小さな楽しみや発見は数多く、作品の手触りを感じ、詩人の書きぶりからその心の動きに触れ得たと感じたときの興味が、他に代え難いものです。また一首について語り合う中で、作品が当初の印象から「面目一新」することもあり、様々な見方によって読みが磨かれ、鍛えられていく過程にも心地良い喜びがあります。

昔は時間空間を隔てた文学を読むことと、現実社会との距離に悩んだこともありましたが。けれど今となっては、作品との対話、作品を通じた人との対話を、力及ばずながらも地道に続けていこうと思います。これからも授業や研究を通して、このような場を共有していければと願っています。

（にのみや みなこ）

新任の先生方より

## 発掘資料から読み解く先人たちの知恵と暮らし

神野 恵

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所  
企画調整部展示公開活用研究室長  
大学院人間・環境学研究科 文化・地域環境講座



2025年4月に客員教授を拝命しました。私は2000年に人・環の博士後期課程を中退し、現在の本務勤め先である奈良国立文化財研究所（以下、奈文研）に就職しました。

大阪市の出身で、高校生の時に研究者を志しました。どの分野に進もうか悩んでいた時、母に誘われて大英博物館展を観に行きました。何千年も昔の人々が手にしたものが、今まさに自分の目の前にあることにとても感動しました。太古の遺物を手に取るような研究がしてみたいと思いました。考古学の研究者になりたいと思った瞬間です。

その当時、日本でも考古学の大発見がありました。奈文研がおこなった長屋王邸の発掘調査です。考古学は日本でも世界でも、フィールドを問わずに研究ができる点も魅力を感じました。京大文学部史学科に進学し、考古学を学びました。大学院は奈文研の客員分野である人間・環境学研究科に進学しました。他分野の手法を広く取り入れた文化遺産研究を学びたいと思ったからです。

奈文研に就職してからは、平城宮・京・寺院の発掘調査に従事しながら、出土した土器・陶磁器の研究をおこなってきました。奈良時代の人々は、生活のなかでさまざまな土器を使っていました。食器や煮炊きだけでなく、墨をする硯、塩を運ぶ焼塩壺、灯火器、奈良三彩など。

私たちが発掘調査で手にする考古資料は、先人たちの生活を支え、時には生存を左右してきた道

具です。私たちはどのように生きてきたのか？そういった「生きること」に密着した研究がしたいと思ってきました。その先に、きっと私たちはどう生きていくべきか？というヒントが隠されていると考えています。

例えば、疫病について。奈良時代の土器は奈良時代の前半と後半で大きく変化します。この変化の背景に、疫病の大流行があったとは、私自身、考えもしませんでした。自分がコロナを経験するまでは…奈良時代の土器の変化は、古代の人々にとっての新しい生活様式だったのだと考えるようになりました。

そのことを発表すると、コロナ禍で不安な毎日を送っていた方々から、「昔の人も正体不明の疫病と闘っていたことを知って勇気をもらいました」とか、「現代医療のありがたさに気づきました」というご意見をたくさんいただきました。

精神的な拠り所として私たちの研究が必要とされる時があることに気づかされました。とくに疫病や災害の歴史を知ることは、「こういうことが起こりえるのだ」という、社会的“免疫力”をつけることにつながると私は考えています。

ちなみに、疫病関連研究の端緒となった土器資料は、私が高校生の時に感動した長屋王邸跡の発掘調査で見つかったものでした。

四半世紀ぶりに人・環に戻ってきたことにも縁を感じます。学生時代にいただいた学恩を少しでもお返しできるよう、努めて参ります。どうぞよろしくお願い致します。

(じんの めぐみ)

新任の先生方より

## 文化と自然が融合する街「京都」での新たな挑戦

桑野 太輔

大学院人間・環境学研究科 地球・生命環境講座  
総合人間学部 地球・生命環境講座（自然科学系）



地球・生命環境講座の助教として2024年に着任しました桑野太輔と申します。専門は地質学・古生物学・古海洋学で、地球の長い歴史の中でいつ、どのような地球環境の変化が起きてきたのか

を明らかにする研究を進めております。特に、堆積物や地層の中に含まれる微小な化石（微化石）を手がかりにその年代を決めたり、地球全体の気候変動に対して海洋がどのように応答してきたのかを調べたりする研究に取り組んでいます。微化石の多くは、肉眼で形が認識できないほどの小さな化石ですが、地球環境の変遷を語るには非常に重要な存在です。

私の研究は、フィールドワークと室内での顕微鏡観察をメインに取り組んでいます。野外調査では、主に川沿いに分布している地層に足を運び、どのような地層が分布しているかを観察するとともに、微化石が含まれていそうな試料を採取します。一方で、海底の堆積物を調べるために研究船に乗ることも多く、これまでに10航海以上の研究航海に参加してきました。特に、アメリカの「JOIDES Resolution号」や、日本の「ちきゅう」といった大型の掘削船にも乗船した経験があります。これらの航海では、数千メートル下の海底から採取した円柱状の試料を24時間体制で分析し、時には2ヶ月ほど船上で生活しながら研究を進めていました。こうして得られた試料を、研究室に持ち帰り、微化石を抽出し、顕微鏡下で化石を観察します。顕微鏡での観察は、非常に地味に見え

る作業ではありますが、一見何の変化も見えないような泥岩試料から過去の海洋環境の変化が読み取れた時が、研究が面白いと思える瞬間です。

さて、京都は一般的に文化的魅力が多い街として知られていますが、地球科学的にも多様で興味深い地域です。京都盆地の周囲には、海洋プレートが沈み込む際に日本列島に剥ぎ取られて形成された付加体の堆積岩が広がり、そこにマグマが貫入してできた深成岩や、その熱によって変成した変成岩も観察することができます。また、京都盆地自体には、かつての大阪湾が内陸まで入り込んでいた時期に形成された大阪層群と呼ばれる比較的柔らかい地層が分布し、現在の鴨川などによって形成された扇状地も広くみられます。新しい地層から古い地層までが揃っており、さらには日本列島の成り立ちを物語っている典型的な地質体が、大学から程近い場所で観察できる点は、教育・研究の場として非常に魅力的だと感じます。

今後は、このような京都の地質の魅力を最大限に活かし、机上の学びと実際の地層を結びつけられるような授業を展開していきたいと考えています。また、地質学は自然環境の理解だけでなく、人々の生活や文化の形成とも深く関わる学問です。学際性を重視する総合人間学部という場だからこそ、自然科学と文化の視点を横断する研究や教育にも挑戦していければと考えています。

まだまだ学ぶことが多くありますが、学生や教職員の皆さんとともに、京都というフィールドを活かした新たな探究の場を築いていきたいと思っています。どうぞよろしくお願ひいたします。

（くわの だいすけ）

（写真撮影 秋田大学 Stephen Obrochta 教授）

連載企画「総合人間学とわたし」

## 総合人間学部とわたし

柴田 悠

大学院人間・環境学研究科 人間・社会・思想講座  
総合人間学部 人間・社会・思想講座（人間科学系）



大学受験を意識し始めたのはいつの頃だったか。おそらく高校生頃だ。

1994年に入学した東京都立国立高校<sup>1)</sup>で、私は「生物」担当の百瀬忠征先生と親しくなっていた。百瀬先生は、毎回の

授業の冒頭で、「今週のネイチャー」という時間を設け、ネイチャー誌の最新号に掲載された世界の最新研究の成果を、高校生にも分かりやすく紹介してくれていた。今から思えば、とても質の高い授業だった（なお百瀬先生は2009年に日本植物学会賞特別賞（教育）を受賞された）。

その百瀬先生から、私は影響を受けた。百瀬先生は授業のなかで、機会があるたびに繰り返しておっしゃっていた。「日本の大学で、ノーベル賞を最も多く輩出しているのは、京都大学だ。君たちは東京にいるから、成績が良い人はつつい東京大学を目指してしまうだろう。でも考えてほしい。東京大学にいく学力があるなら、京都大学を選ぶことができる。カリキュラムでの自由度が高いのは、京都大学のほうだ。京都大学では、好きなだけ自由に研究ができるから、ノーベル賞がたくさん出ているんだ」。

かくして私は京都大学をめざすことになった。父が京都市出身で、私も幼い頃から京都を何度も

訪れたことがあったので、京都になじみがある、ということもあったかもしれない。それでも、百瀬先生の薫陶がなかったら、わざわざ遠い京都大学を選ぶことはなかっただろう。

高校3年生のとき、私は理系コースで学んでおり、脳科学や宇宙論に関心があった。今から思えば、脳科学であれば理学部よりも総合人間学部のほうが合っていたように思うが、当時の私は「ノーベル賞受賞者が多く出ているから」という安易な判断で理学部を受験した。そして不合格だった。

その後1年間、いわゆる「自宅浪人」をした（ただし春学期は週に1コマだけ駿台の「数学の本質」についての授業を受け、夏休みは駿台の「京大化学」の講習を受けた）。高校の合唱部（名称は「音楽部」）の友人も、東京大学の理系学部をめざして自宅浪人することになったため、彼と励まし合いながら勉強した。ときに市民体育館でバスケをしたりして、一緒に気分転換もしたものだ。彼には感謝しかない。1年間浪人するなかで、雑誌『大学への数学』では「添削者になる権利」を得るまで成績が上昇し、秋の駿台の京大模試では志望学部で1位となり、入試当日の「化学」ではおそらく満点を取った。こうして無事、彼とともに、志望校に合格した。

ただ、私は、志望学部を理学部から総合人間学部（理系）に変更していた。これはどういうことなのか。この変更が、私が「総合人間学」に出会っ

1) 「トリツ高校」なのか「コクリツ高校」なのか分かりづらい名前だが、「クニタチ高校」と読む。山極壽一元総長の出身校でもある。しかし山極先生が高校の先輩であることを知ったのはごく最近のことで、学部時代に山極先生の講義やゼミに参加していたときも、山極先生が総長の任期を終えられた後に或る研究会でお会いしたときも、先輩であることを存じ上げなかったため、その話題についてお話することができなかった。

た瞬間であり、本稿において重要である。

私は自宅浪人中、「何も所属先がない状態」そして「先が見通せない状態」を初めて経験するなかで、「自分は何者なのか」というアイデンティティの問題に直面していた。「自分はどのような人生を生きていきたいのか」「自分にとって幸せとは何か」「どうしたら幸せになれるのか」といった人生についての問いを、深く抱くようになっていた。

もともと中学時代から、そのような問いは友人や家族との関わりの中で生じてはいた。しかし浪人時代には、「自分が何者でもない」「未来が不確実」という初めての環境のなかで、そのような問いがより切実になったのだと思う。

人生の問いへと関心が広がっていくと、脳科学や宇宙論「だけ」では関心に対応できなくなり、心理学や哲学などの（いわゆる文系の）本を町の本屋でさまざまに立ち読みしては、なけなしの貯金を手に「ほんとうに読みたい本はどれか」を吟味して買い（主に安価な文庫や新書だったが）、感化されながら読んだ。

その結果、私の関心は、脳科学・宇宙論だけでなく、心理学・哲学・精神分析に広がり、「理学部」という志望学部では対応しきれなくなっていた。そこで新たな志望学部として私が発見したのが、「総合人間学部」だった。「総合人間学部」の理系入試枠であれば、これまでの理系の受験勉強をそのまま進めればよいし、入学後に「理系」と「文系」の両方を視野に入れながら、どちらに進むこともできる。理系的関心と文系的関心の両方を持っていた私にとっては、まさに理想的な学部だった。これが私にとって、「総合人間学」という概念との出会いだった。しかしまだ、私は「総合人間学」を体験はしていなかった。

1998年の春、私は総合人間学部に入學した。そこで出会った仲間たちや先生方、カリキュラムの多様性と自由度、そして授業・指導の質は、期待どおりというよりもむしろ、期待以上のものだった。それを象徴するのが、学部時代の恩師・杉万俊夫先生（現・京都大学名誉教授）の講義・実習・ゼミ・卒業研究指導だった。

杉万先生は、社会心理学が専門だったが、まさにお一人で総合人間学部の理念（つまり「総合人間学」）を体現しておられる研究者・教育者だった。「社会構成主義」の哲学をベースにし、文系的なフィールド研究（参与観察やインタビュー調査など）や理論研究だけでなく、理系的な計量分析やコンピューター・シミュレーションも行い、一般社会に働きかけるアウトリーチも行っておられた。それらすべてを、私たち受講生・ゼミ生に惜しみなくご教授くださり、体験・実習させてくださった。

3回生からの研究室ゼミでは、ニクラス・ルーマンの『社会システム理論』の原著や、大澤真幸の『身体の比較社会学Ⅰ・Ⅱ』を講読してくださった（なお私はその大澤先生の理論に感動し、卒業後1年間の浪人を経て、修士課程から人間・環境学研究科の大澤先生の社会学研究室に入ることになった）。卒業研究では、杉万先生にご紹介いただいた現場（不登校等を経験した通信制高校の高校生たちが通う民間サポート校）で、1年間のフィールドワークをさせていただいた（大阪校の現場に深く関わりつつ、全国各地の系列校も廻った）。

杉万先生の講義・実習・ゼミ・卒業研究指導において、私は、「総合人間学」をまさに体験させていただいた。そこで私が体験した「総合人間学」とは、理系と文系のあいだの垣根を必然的に超えて、また、大学と一般社会のあいだの垣根も必然的に超えて、「人間へのより深い理解」へのあくなき挑戦をつづけ、さらに、その理解にもとづく「人間が抱えている問題」の解決へのあくなき挑戦もつづけ、しかも「それら2つの挑戦が互いに互いを深め合うという相互作用」も大事にする、という学問のありかただった。

私にとって「総合人間学」とは、そのような真摯な学問である。私自身も、大学院進学以降は「社会学」の分野で研究を進めているが、そのような真摯な学問の実践をめざしたいと思う。

（しばた はるか）





# 総人環

## 編集後記

◆『総人・人環広報』第75号をお届けします。今号では、新たにお迎えした6名の先生方からのメッセージと、連載企画「総合人間学とわたし」に1名の先生からのご寄稿を頂きました。今号で記事を寄稿頂いた先生方の専門は、数学、英文学、社会言語学、中国古典、考古学、地質学、社会学と多岐に渡ります。これ

らの一見「バラバラ」な専門分野をどのように学術越境できるかの思考実験をしてみます。地域の人々の暮らしを支える土地の歴史は地質の中に刻まれており、その自然との協調の中で世代を越えて住み続ける人々の中で蓄積される暮らしの叡智は、考古学的発見や古典文学の表現を通して見出すことができるかもしれません。そして、そのような過去の人々の叡智の蓄積の上に、現在の言語政策や社会政策が進められており、さらには、その地域の人と社会の活動の蓄積から学習されたデータを用いて、地域の将来の発展についてのシミュレーションが可能になるかもしれません。人間・環境学研究科／総合人間学部が対象とするのは、人とその周囲の社会環境や自然環境、そしてそれらの相互作用の時空間的解明です。新しい学問を切り開くためにも、本誌を通して異分野の越境を楽しんで頂けたら幸いです。(T. T.)

総合人間学部  
人間・環境学研究科

広報委員会